

6年2組

未来につながる森林プロジェクト ～県産材を利用して伝えたい私たちの想い～



これまで行ってきた森林学習。お山の発電所や北信木材センターの見学や、長野森林組合の赤松課長さんのお話を聞く中で「自分たちのやっていることが未来へつながっていくんだ」ということを感じ、今回の活動を「未来につながる森林プロジェクト」として、自分たちの想いを形にしていけることになりました。

未来へつながる森林プロジェクト

その後、子どもたちは様々な施設に電話をしたり、実際にその場へ行って担当の方とお話してベンチの設置場所を考えたり、自分たちから進んで活動していきました。市議会議員さんのもとへ行きお話を聞いてきた子たち、信州大学教育学部のリニューアルされた図書館に行き設置場所を考えてきた子たち、JR や長野電鉄、MIDORI のりんごの広場、柳原交流センター、学校医さん、ミールケアさん、など、「なぜその場所に置かせてもらいたいのか」と自分たちの願いをしっかりとって自分たちの手で前に進んでいく子どもたち。さらには、「ベンチを置くだけでは想いは伝わらない」と考え、それぞれこれまでの学習をまとめるポスター作りにも励んでいます。電話でお話を聞いたり、直接お話を聞きに行ったりする中で、ベンチの設置についてはお断りされることもありましたが、それは、安全面や管理面での問題があるからです。それを聞いた子どもたちは、断られたことは残念に思いながらも、そこを問われることについては納得していました。そこで、ベンチの設計チームは、どうしたら安全で安心できるベンチができるのかを模索しながら、実際に作ってみて課題を考えて準備を進めてきました。



そんな活動を進めながら、自分たちの購入した丸太を製材してもらおう瑞穂木材さんへ見学に行っていました。

一人ひとりの意識を高められるように

「今日の5・6時間目に総合で Every の木材についてのニュースを見て、最後の方に宮崎社長が言っていた【木材の値段が高い安いだけでなく国産材を使うことの意味をもう一度考え直していきたい】という言葉が一番心に残りました。赤松課長さんも似たようなことを言っていたなと思いました。「この時代に生きていくものの使命」ちゃんとつながっているんだなと思いました。(Sさん)



瑞穂木材さんに見学に行く前に、ニュース番組でやっていたウッドショックの特集を子どもたちと見ました。その中で、瑞穂木材の宮崎社長が言っていた「国産材を使う意味」。特集ではキーワードとなる情報がたくさんあった中で、宮崎社長の言葉がSさんの心に一番残ったのは、私たちが今一番伝えたいことと繋がっているからではないかなと思います。そんな思いを携えて瑞穂木材さんの見学に行ってきました。

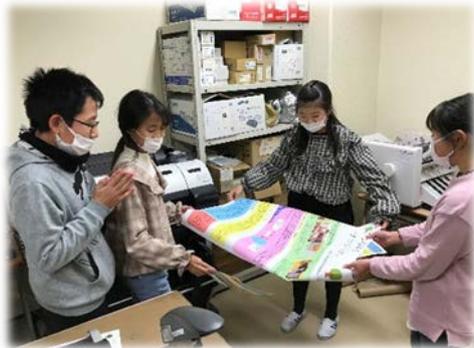
子どもたちが製材の過程で一番気になっていたのは、右の写真にもある乾燥機。丸太から製材されて使えるようになるまでには相当な時間がかかることも知っていましたし、この日触らせたもらった角材にしたばかりの木はかなり湿っていることを実感したので、この乾燥の技術には子どもたちも驚いていました。昔は何十社もあった製材工場も、林業の衰退により今ではかなり少なくなってしまうようで、木材の安定供給のためには、こう



した設備が必要不可欠だということが分かりました。しかし、山から木を伐り出す人、製材工場が減ればそれだけ県産材が市場に出回ることが少なくなり、結果として輸入材に頼らざるを得なくなります。そうなれば、森林の適切な整備もできなくなる。だからこそ、県産材を積極的に使っていくことで、林業も力強い産業となり、それが森林を守ることに繋がっていくということを、宮崎社長や宮崎専務のお話を聞いて感じました。Nさんが聞いた「日本の森林をもっと良くしていくために何が必要ですか?」という質問に「一人ひとりの意識です」と答えてくれた宮崎社長。ベンチ作りを通して、県産材を使う意味を伝えたいと願う子どもたちも、自分たちの活動を通して、そうした一人ひとりの意識を高めていくことを願っています。



「伝えたいという想い」「安全性」にこだわって準備を進めてきた子どもたちの様子



地域にベンチを置かせていただくことで、自分たちの学んできたことや県産材を利用する意味について多くの人に伝えたいと願い、進めてきたこの活動。ベンチの置き場所も自分たちで考え、電話で交渉したり、実際にその場へ行って話をしてきたりしながら、ベンチの設置場所を決め出していきました。また、ベンチを設置させていただく付近に掲示するポスター作りも Google スライドを4~5人で共有しながら、意見を出し合い、何度も構成を練り直しながら作っていきました。設計チームは、設計図から木取り図まで全て自分たちで作り、より安全性が高く、座り心地が良いベンチができるように考えてきました。「想いを伝えるためにはやっぱり良いものを作りたい」と願っていた子どもたちは、真っすぐに木を切る練習やドリルを打つ練習を何度も行ってきました。失敗もたくさんありましたが、やってみるからこそ気づくこともあり、自分たちなりに自信をもってベンチ作り当日に臨みました。

いよいよ迎えたベンチ作り当日～座ってくれる人たちのことを想って～

長野県森林づくり県民税（森林税）を活用して購入した県産材の杉を使ったベンチ作り。当日は、瑞穂木材さんや炭平コーポレーションさん、大工さん、長野県地域振興局の方、お仕事で木材加工に関わる保護者の方など、多くの方に応援団として来ていただき、子どもたちの活動に携わっていただきました。講師の方をお出迎えする子どもたちの姿がとても素敵で、これだけ多くの方に協力していただけることのありがたさを子どもたちもしっかり感じているのだなと思いました。しかし、こうして多くの方が子どもたちのために集まってくださったのは、子どもたちの熱意が伝わっているからだと思います。





この日は、最初に大工さんがのこぎりの使い方を教えてくださいました。大工さんの切った木の切り口を見た子どもたちからは「おお～！すごい！」と驚きの声があがっていました。前日、「先生、本番の木を切ると思うと緊張する」と言っていたSさんたちのグループは、教えてもらった技術を生かして、手際良く作業を進め、あっという間に組み立てに必要な材料を切り終えていました。

私は信州大学教育学部に置かせてもらうベンチのグループに関わっていたのですが、切る人、磨く人、組み立てる人に分かれて活動していました。Aさんはひたすら木を切っていきます。やってみると分かりますが、木を切る作業はかなり疲れます。しかし、Aさんからは「疲れた」という言葉は一切聞こえてきません。それどころか、それだけ頑張っているにもかかわらず、組み立てていく中で木材に多少の誤差があることが分ると「切る時に少し曲がっちゃったかも。ごめん。」と仲間に伝えている姿がありました。組み立てている子たちは、ネジ打ちをする際に見た目もきれいにできるようにと、一つ一つ定規で位置を決め出してからネジを打っていました。なぜ、これだけこだわり、丁寧に作業を進めていくのか。それはきっと、子どもたちの心の中にこのベンチに座ってくださる方々への“想い”があったからだと思います。



制作するベンチは全部で10基。この日完成させることはできませんでしたが、次の日も「早くベンチを作らせて！」とせがむ子どもたち。形はできていても、少しのズレを気にして修正しようとしている子どもたちが、「完成した！」と言うベンチがどのようなものになるのか楽しみです。

